

J. F. ライヒャルトのリート研究：その1 出版楽譜の概要

著者	村田 千尋
雑誌名	研究紀要
巻	40
ページ	1-27
発行年	2017-02-25
出版者	東京音楽大学
ISSN	0286-1518
URL	http://id.nii.ac.jp/1300/00001125/

J. F. ライヒャルトのリート研究：その 1

——出版楽譜の概要——

村田 千尋

はじめに

ヨハン・フリードリヒ・ライヒャルト Johann Friedrich Reichardt (1752-1814) は、日本においてさほど知られた存在ではないが、1800 年前後のドイツにおいて最も影響力のある音楽家の一人であり、近年でも北ドイツを中心に重要な研究対象とされている¹。

彼はベルリンの宮廷楽長として数多くのオペラやジングシュピールを作り、ゲーテ Johann Wolfgang von Goethe (1749-1832) に対してはあたかも音楽顧問のような立場で、彼が書いた多数の戯曲に音楽を付けたことで知られている。そしてコッホ Heinrich Christoph Koch (1749-1816) による『音楽事典 Musikalisches Lexikon』(1802) にも、ジングシュピールよりもさらに軽い音楽劇のジャンル、「リーダーシュピール」を作り出した人物として紹介された [Koch, 1802: 904ff.]。

さらに、彼の活動は音楽評論の草分けと見なすこともできる。彼はヨーロッパ各地を旅行して訪問地の音楽状況について詳しく報告するとともに、18 世紀半ば以前の古い音楽を紹介し、あるいは器楽にも積極的な意義を認めるなど、18 世紀から 19 世紀にかけて起こった音楽観の大きな変化に深く関わっていた。そして当時の文化人や若いロマン主義文学者と交流し、彼らの音楽観、文学観に大きな影響を及ぼしている²。

ライヒャルトは第二次ベルリン・リート楽派の代表者とされ、生涯にわたって、ドイツ語による独唱歌曲、ドイツ・リートを最も重要な創作ジャンルとして作り続けた。そして 1773 年に出版した“Vermischte Musicalien” (表 1 : 3) に始まり、亡くなる 2 年前、1812 年に出版した“Drey Lieder von C.L.Reissig” (表 1 : 86) まで、数多くのリートを出版している。

1 ライヒャルトの没後 150 年である 1964 年に《ゲーテ歌曲集》(表 1 : 76-78, 84=1809/11) が“Das Erbe deutscher Musik”の第 58, 59 巻として出版され、その前後には二冊の浩瀚な研究書、[Salmen, 1963] と [Pröpper, 1965] が書かれている。そして、生誕 250 年の 2002 年にはハレのヘンデル・ハウスで記念展示が行われ、その前後に [Salmen, 1963 (再版)], [Ruf, 2003], [Salmen, 2003] などが出版された。

2 滝藤早苗氏の博士論文 [滝藤, 2016] は未公開ながら、ライヒャルトの活動が当時の芸術思潮にどのような影響を与えたかということを追求した労作である。

1750年代にベルリンで始まったリート創作運動は北ドイツの地方的な動きであり、啓蒙主義的な性格が強かった。そのため、「誰にでも歌える」ということが重視され、歌いやすい旋律を伴奏が支えるという単純なものであった。ライヒャルトと盟友シュルツ Johann Abraham Peter Schulz (1747-1800) も第一次楽派の考え方を受け継ぎ、「誰にでも歌える」ことを「民謡調 Volkston」という言葉で説明している [村田, 1985: 53f.]。

そのいっぽうで、ライヒャルトは第一次ベルリン・リート楽派の後継者³という立場を越えた多彩な活動を展開しており、ザルメン Walter Salmen (1926-2013) は、「単純な舞曲リートから朗誦楽曲 Deklamtionsstück に至る、ギャラントのアリエットから力強く雄大な様式に至る」 [Salmen, 1963: 296] と述べている。しかしライヒャルトの重要性はその多彩さにあるのではなく、19世紀的芸術リートを準備し、北ドイツの地方文化に過ぎなかったリートを全ドイツの文化へと導いたという点にある。もちろんライヒャルト一人の力でなしえることではないが、旋律に朗誦性を取り入れ [村田, 1982]、旋律から独立した伴奏を模索し [村田, 1983]、通作を指向する [村田, 1984] ことによって、詩の表現を重視した新しい時代のリート＝芸術リートに至る道を切り拓いた [村田, 1985] ということができる。

ところが彼の創作数は余りにも多い。クレツチュマル Hermann Kretzschmar (1848-1924) が歌曲集 30 冊、総数 700 曲のリート作品を数え [Kretzschmar, 1911: 291]、ザルメンはおおよそ 1500 曲 [Salmen, 1963: 296] としているように、その作曲総数すら判然としない。この事実からもわかるように、これまで全リートを対象とした包括的・集中的な研究は事実上存在しなかったのである。

そこで本稿は、ライヒャルト・リート研究の第一歩として、彼が出版したリートの楽譜を整理し、その概要を明らかにすることを目的とする。

I 蒐集した資料の概要⁴

1. 蒐集方法

今回の楽譜蒐集は、拙稿『伴奏の成立』 [村田, 1983] を作成する際に集めた、約 40 冊 (約 500 曲) を基礎としている。それらはヨーロッパ各地の図書館からコピー、あるいはマイクロフィルムのかたちで蒐集したもの、昭和音楽大学名誉教授正木光江先生から提供して戴いたマイクロフィルム焼き付け、国立音楽大学招聘教授磯山雅先生にご協力戴いて集めたバイエルン国立図書館所蔵楽譜などが中心であった。今回は、ブリティッシュ・ライブラリー等から電子

3 ライヒャルトは第一次ベルリン・リート楽派の主要メンバーであるベンダ Franz Benda (1709-86) の女婿であり、同時にヒラー Johann Adam Hiller (1728-1804) の弟子でもあるため、まさに第一次ベルリン・リート楽派の正統な後継者といえる。

4 表1「ライヒャルト：出版楽譜一覧」を参照願いたい。今回蒐集した全楽譜についてその概要を示した。

データの形で蒐集し、ライヒャルト研究家の滝藤早苗氏にも何点かをご提供戴いた他、IMSLP (The International Music Score Library Project = Petrucci Music Library) や The Internet Archive など、公開されているデータベースも活用した⁵。

今回の調査の出発点としたのは、ライヒャルト自身による出版目録 [Reichardt, 1782d/91]、プレッパ Rolf Pröpper (1929-?) の『ライヒャルトの舞台作品』[Pröpper, 1965: II] に掲載されている楽譜目録、シュラーガー Karlheinz Schlager (1938-?) が編集した“RISM” (Répertoire International des Sources Musicales) A I, 7+13 [Schlager, 1978/98] である。これらの目録に掲載されているライヒャルト本人が出版した楽譜をリストアップし、さらに他の情報源から得られたデータも加えた。それは、後に述べるように「リート集」から「雑誌付録」まで様々であったが、中心としたのはライヒャルト自身が出版した「リート集」である。なお、ライヒャルトの歌曲集は抜粋版やギター伴奏編曲版など、様々な形で再版されることがあるが、今回はこれらを参照することは行わなかった。

いっぽう、ライヒャルト自身が出版したものであっても、リートの単独出版については従前より所有しているものに留め、新たな蒐集対象とはしなかった。しかし、単独出版のリート楽譜は、そのほとんど全てがいずれかの「リート集」や「楽譜集」、「雑誌付録」にも掲載されているため、たとえ蒐集を行わなくとも概要を知る妨げとはならない。そして、オペラなどのヴォーカルスコアについても、IMSLPによって容易に手に入るものに限定した。また、ライヒャルト以外の人が編集・出版した「歌曲集」や「雑誌」も、まだ調査の余地があるものと思われる。さらに、今回の調査はライヒャルト存命中に限定したため、生前に企画されたことが明らかな1冊を除いて、1815年以降の出版物は対象としていない⁶。

問題は、上記以外にも存在している。ライヒャルトが作った歌曲の歌詞はドイツ語と限らず、フランス語やイタリア語を歌詞とした歌曲も数多く存在する。彼がいかに語学に長け、全ヨーロッパ的な活動をしていたかということの表れであろう。今回の研究調査において中心となるのはあくまでもドイツ語歌曲ではあるが、イタリア語やフランス語による歌曲も参考として見ていく。なぜなら、一つの歌曲集に異なる言語の歌曲が収められていたり、フランス語歌曲、イタリア語歌曲にドイツ語歌詞が併記されたりすることもあるからだ。また、英訳歌詞でも出版されている⁷。

5 正木、磯山両先生をはじめとして、蒐集にご協力いただいた諸先生方、各図書館に御礼申し上げる。

6 1815年以降の出版物は対象にしていないといっても、復刻版は利用したし、EDM (Das Erbe Deutscher Musik) のような学術版については、随時参照している。いっぽう、各種名曲集、民謡集にもライヒャルトのリートはしばしば載せられているが、今回は調査対象としなかった。

7 “Romances d’Estelle par M.Florian” (表1 : 36 =1794) と “Douze Elegies et Romances” (表1 : 67 =1804) はフランス語歌曲だけ、“Sonetti e Canzoni di Petrarca” (表1 : 87 =o.J.) はイタリア語歌曲だけであり、“Le Troubadour” I ~ III (表1 : 71, 72, 74 =1805-06) は3カ国語の混成である。また、未蒐集の “Six canzonettes italiennes et six romances françaises” (1802) もイタリア語とフランス語の混成である。いっぽう、イタリア語歌曲集である “Sonetti e Canzoni di Petrarca” においては掲載された8曲全曲にドイツ語歌詞が、“Kleine Klavier- und Singestücke” (表1 : 16 =1783) でも3曲のフランス語歌曲中1曲にドイツ語歌詞が併記されている。英訳歌詞による出版は “The German Erato” (表1 : 57, 61, 64, 65 =1799-1801) のシリーズである。

2. 蒐集結果

その結果、前回のほぼ倍に当たる約90点(1,000曲余)を集めることができた⁸。まだ多少の漏れがあるとは思われるが、彼のリート創作のほぼ全容を見ることができるとは思わないかと考えている。

ライヒャルト自身が出版した楽譜、雑誌の中で、存在がわかっていながらまだ蒐集していないのは以下の5種である。

- a. Melodien zu Herrn Professor G.J.Mark's Heiligen Liedern (Altona, 1766)
- b. Frohe Lieder für deutsche Männer (Dessau, 1781)
- c. Blumenkranz, dem neuen Jahrhundert geflochten (Berlin, 1800)
- d. Six canzonettes italiennes et six romances françaises (Paris, 1802)
- e. Blumenkranz dem Jahre 1803 geflochten (Berlin, 1802)

[a.] はR869としてRISM [Schlager, 1971: 135] に掲載されているが、ライヒャルト自身が作成した出版目録 [Reichardt, 1782d] には掲載されていない。1766年はライヒャルトがMagisterの資格を得た翌年(13歳)であり、他の出版物と比べても異常に早いし、プレッパもリストに掲載しておらず [Pröpper, 1965]、真作とは認めがたい⁹。なお、フリートレンダーはマルク自身の作曲と推定している [Friedlaender, 1902: I,1, 15/178f.]。また [b.] はかつてベルリン国立図書館のみが所蔵していたが、同館の資料は消失した可能性が高く [Pröpper, 1965: II 344]、RISMには掲載されていない¹⁰。したがって、蒐集の可能性がありながら未見のものは [c.] から [e.] までの3点ということになる。これら3点については今後、蒐集に努めたいと考えている。

II 出版の形態

今回収集した楽譜資料は、その形態から大きく9種に分けることができる。

8 ライヒャルトの場合、同一作品がしばしば異なる曲集に再掲されており、集めた延べ作品数は1,200曲を越える。しかし、再掲作品の異同については今後の課題とし、本稿では取り扱わないことにする。

9 NG2 [Helm, 2001: 140] でも言及されていないが、MGG2 [Ottensberg, 2005: 1475] には掲載されている。

10 books.google.等を用いた検索結果からは、20世紀末に書かれた文献においても [b.] に言及している場合のあることがわかる。フリートレンダーは同歌曲集の序文が“Musikalisches Kunstmagazin”にも拡充されて掲載されているとしており [Friedlaender, 1902: I,1, 197]、同誌第1巻冒頭にある“An junge Künstler”という題名の論文がそれと思われる [Reichardt, 1782a: 1-7]。20世紀末に書かれた文献において言及されているのが歌曲集本体であるのか、序文であるのかということは定かではない。したがって、ベルリン国立図書館以外にも所蔵されており、現存する可能性があるが、所蔵館を特定できず、残念ながら現段階では入手に至っていない。

1. 「リート曲集」(ライヒャルト単独)

ライヒャルトは生涯にわたって自分が作曲したリートだけを掲載した「リート曲集」を出版しており、今回は23種36冊を集めることができた。“Six canzonettes italiennes et six romances françaises” (1802)のみ未蒐集である。なお、例外的に妻ユリアーネ Juliane Reichardt (1752-83)、娘ルイーゼ Louise Reichardt (1779-1826)の曲と一緒に掲載されている場合がある¹¹。

2. 「楽譜集」(ライヒャルト単独)

ライヒャルトのリートを掲載した最初の出版楽譜である“Vermischte Musicalien”を始めとして、幾つかの楽譜はクラヴィーア曲や宗教合唱曲など、他のジャンルと一緒にリートが掲載されている。今回は3種6冊を集めることができた。

3. 「リート叢集」(ライヒャルトの編集)

ライヒャルトはしばしば、様々な作曲家のドイツ語歌曲を集めて「リート叢集」を編集した。掲載曲の1/4から1/2程度はライヒャルト自身の作品であり、それ以外は第二次ベルリン・リート楽派の作品が多いが、“Neue Lieder geselliger Freude” II (表1:68=1804)にはモーツァルトのリートも3曲掲載されている。今回集めたのは4種8冊であり、先に示した未蒐集の“Blumenkranz, dem neuen Jahrhundert geflochten” (1800)、“Blumenkranz dem Jahre 1803 geflochten” (1802)もこのタイプの楽譜集であると思われる。

4. 「リート叢集」(ライヒャルト以外の編集)

ライヒャルト以外の方が編集した楽譜集に彼のリートが掲載されることもあった。1798年にベルリンで出版された“The German Erato” (表1:57)は英語訳されたリートを掲載しており、15曲中4曲はライヒャルトの作品である。イギリスにドイツ歌曲を伝える目的で編集されたと考えられ、シリーズ化されて1799年には“A Collection of German Ballads and Songs” (表1:61)が、1800年には“Twelve Favourite Songs” (表1:64)が出版されており、単独出版の“Leonora” (表1:65=1801)もこのシリーズに含まれる。ライヒャルト以外には、ハイドン Franz Joseph Haydn (1732-1809)、モーツァルト Wolfgang Amadeus Mozart (1756-91)、ツェルター Karl Friedrich Zelter (1758-1832)などがこの叢集に掲載されている。

1815年に出版された“Anhang zu Beckers Taschenbuch 1809” (表1:89)は1809年版の

11 “Oden und Lieder” III (表1:9=1781)にはユリアーネの歌曲1曲が、“XII Deutsche Lieder” (表1:63=1800)にはルイーゼの歌曲4曲が収められている。このほかに、“Gedichte von Rudolphi” (表1:12=1781)にもユリアーネの歌曲3曲が収められている。ベルリンの楽師長F.ベンダの娘であるユリアーネは父から音楽の手ほどきを受けたと考えられ、1782年には“Lieder und Klaviersonaten”も出版している。いっぽうルイーゼは声楽教師として活躍し、“6 geistliche Lieder” (1823)など、幾つかの出版作品がある。

年鑑で言及された歌曲を集めた付録曲集であり、出版はライヒャルトの没後であるが、その企画は1809年に立ち上がったと思われるので、今回の調査対象に含めた。ただし、『年鑑』本体において作曲者は誤ってReinhardとされており、『付録曲集』になってようやく修正されている。

5. 「雑誌付録」(ライヒャルトの編集)

ライヒャルトは音楽評論の草分けの一人であり、多くの音楽雑誌を編集出版している。いずれも、1年ないし2年で休刊せざるを得なかったが、“Musikalisches Kunstmagazin”(表1:14, 27 =1782/91)は、かなりの反響があったという[滝藤2016: 27]。政治誌である“Deutschland”[表1: 47-50 =1796]も含めて、彼の雑誌にはしばしば自身のリートや他人の様々な曲が付録として掲載されている。ライヒャルトのリートが確認できたのは6種11巻であった。

6. 「雑誌付録」(ライヒャルト以外の編集)

他の人が編集した文芸雑誌にもライヒャルトのリートが掲載されることがある。今回は10種14冊を確認できた。中でも3種の雑誌“Thalia”(表1: 21 =1787)、“Die Horen”(表1: 42 =1795)、“Musen Almanach”(表1: 51, 54 =1796/97)に彼のリートを掲載したシラーFriedrich von Schiller(1759-1805)との関係は重要であろう。

7. 「書籍付録」

ライヒャルトのリートは独立した書籍に付録として掲載されることもあった。その第1は“Gedichte von Rudolphi”(表1: 12 =1781)である。ルードルフィKaroline Christiane Louise Rudolphi(1753-1811)はライヒャルトが発見し、紹介の労を執った女性詩人である。彼はこの詩集を自ら編集して80編ほどの詩を集め、その内9編に自ら作曲した楽譜を、3編に対して妻ユリアーネが作曲した楽譜を掲載した。さらに6編については彼自身の歌曲集“Lieder für Kinder”(表1: 10, 11 =1781)に楽譜が掲載されていることを示している。

また2冊の小説にも付録として彼のリートが掲載された。ゲーテの“Wilhelm Meisters Lehrjahre”(表1: 44 =1795)に載せられているのはライヒャルトのリート6曲だけであるが、アルニムAchim von Arnim(1781-1831)の“Geschichte der Gräfin Dolores”(表1: 83 =1810)にはライヒャルトと娘ルイーゼを含む5名の曲が載せられている。

8. 「オペラ・ヴォーカルスコア」

ライヒャルトの宮廷楽長としての仕事は、宮廷歌劇場にイタリア語によるオペラを提供することであったので、そのフルスコアやヴォーカルスコアも当時から出版されている。また、ゲーテとの共同作業によるジングシュピールも数多く作っており、リーダーシュピールも含め

て、ドイツ語オペラの楽譜も出版された。今回はドイツ語オペラ4曲“Hänschen und Gretchen”（表1:1=1772）、“Amors Guckkasten”（表1:2=1772）、“Erwin und Elmire”（表1:34=1793）、“Jery und Bätely”（表1:35=1793）を対象とし、それらの中から独唱として歌える曲を抜き出した¹²。調査としては幾分偏りが生じることになるが、全体には影響を及ぼさないと考える。

9. 「単独出版」

先にも述べたように、今回の調査はあくまでも「曲集」を中心としているので、単独で出版されたリートについては、従前より入手していた曲のみを対象とした。扱ったのは、“Leonora”、“Monolog aus Göthe's Iphigenia”（表1:69=1804）、“Clärchens Lied”（表1:88=o.J.）の3曲である。前述のように、“Leonora”はイギリス向け楽譜シリーズの1巻であった。

III 生涯と出版の経緯¹³

1. 修業時代

ライヒャルトは1752年11月25日、東プロイセンのケーニヒスベルク（現ロシア領カリニングラード）に生まれた。リュート奏者の父から音楽の手ほどきを受け、1765年に弱冠12歳でMagisterのディプロマを取得すると、東プロイセンにおいて演奏活動を開始している。しかし、1767年（14歳）にケーニヒスベルク大学の法学部に入学し、ハーマン、カント等の講義を受講している。この経験が、彼の教養の源となったのであろう。

1771年に大学を中退すると、彼は3年にわたって北ドイツを中心に職探しの旅を行い、同年9月8日にライプツィヒでピアノ協奏曲とヴァイオリン協奏曲を披露している。72年には2曲のオペレッタとクラヴィーア・ソナタを出版し、専門的音楽家としての活動を開始した。そして1773年、多数のリートを取めた“Vermischte Musicalien”を、1775年には最初のリート曲集である“Gesänge fürs schöne Geschlecht”（表1:4）を出版している。同じ頃、音楽文筆家としての活動も開始しているが、1775年にはラグニット（現ロシア領ネマン）の宮廷秘書官となった。

ここまでは彼の修業時代である。この時期に、リート曲集1冊と混成の楽譜集1冊が出版され、雑誌“Göttinger Musenalmanach”第6巻（表1:5=1775）に1曲が紹介されている。

12 “Lieder aus Liederspiel Lieb' und Treue”（表1:62=1800）はリーダーシュピールからの抜粋であるが、ライヒャルト自身による抜粋であり、歌曲集の体裁を整えているため、「オペラ・ヴォーカルスコア」ではなく、「リート曲集」として数えている。

13 ライヒャルトのリート創作を中心に、[Reichardt 1805/13/14]、[Pröpper, 1965]、[Salmen, 1963]、[滝藤 2016]等を参考にまとめた。

2. ベルリン宮廷楽長時代

1774年末にベルリン宮廷楽長のポストが空席となったのでライヒャルトは後任に応募し、1775年12月25日にポツダムで行われたフリートリヒ大王 Friedrich II (1712-86) の御前演奏を経て、1776年に宮廷楽長に任じられている。宮廷楽長としての任務は、宮廷の祝祭のためにイタリア語オペラを作曲し上演すること、あるいは他人の作品を改訂して上演することであった。この仕事は必ずしも彼が望む音楽の方向とは合わないものだったようだ [滝藤, 2016: 24ff.]。たしかに、就任当初は活発なオペラ創作活動をしていたが、1780年頃から大王が亡くなる86年までの間は新作の上演をしていない。彼は宮廷外に活動の場を求めたようで、1782年に雑誌“Musikalisches Kunstmagazin”を出版し、1783年からは演奏会シリーズ“Concerts spirituels in Berlin”を主催して、過去の大作作曲家を紹介するという活動を行った。

1786年にフリートリヒ大王が没してフリートリヒ=ヴィルヘルム二世 Friedrich=Wilhelm II (1744-97) が即位し、ライヒャルトは引き続き宮廷楽長に任命されている。この頃からゲーテとの親交が始まり、事実上の音楽顧問として、彼が書いた多くの戯曲に音楽を提供している。

1776年から90年までの15年間は、ライヒャルトのリート創作人生の中でも豊かな時代であったと考えて良いだろう。77年にユリアーネと結婚したことも、彼のリート創作に大きな影響を与えたと考えられる。結婚翌々年の1779年に“Oden und Lieder”第1巻(表1:7)を出版したのを皮切りに、続けざまに8冊のリート曲集あるいはそれに準ずる曲集を出版している。しかし、83年5月9日に彼女が亡くなると、しばらくはリート創作から遠ざかっているように見え¹⁴、87年になってようやくリートの出版を再開している。結局1776年から90年の間にはリート曲集5種11冊、楽譜集1冊、リートを収めた雑誌1種2巻、リートを付録とした書籍1冊を出版し、それ以外に2種の雑誌でリートが紹介されている。

3. 混乱期

ライヒャルトは1790年末に病気でしばらく休まざるを得なかった。これをきっかけに彼は宮廷楽長職を休職し、ハレ近郊ギービエンシュタインに農場を借りて引きこもる。後に、彼の新しい家は若い文学者たちのたまり場となり、以降の思潮に大きな影響を与えることになるのだが [滝藤, 2016: 32ff.]、本稿の趣旨とは直接の関係がないので、ここでは立ち入らない。

休職中の1792年に4度目のフランス旅行を行ったライヒャルトは、フランス革命への共感を表明するようになり、それが理由で1794年、ベルリンの宮廷楽長を解任されてしまった。しかも、1796年には「クセーニエン論争」が勃発し、それまで懇意にしていたゲーテやシラー

14 1784年に“Lieder von Gleim und Jacobi”(表1:19)を出版しているが、87年の“Lieder für Kinder”第3巻(表1:20)まで、多少の間が空いている。“Lieder von Gleim und Jacobi”についても、83年までに準備ができていたと考えるべきかも知れない。

からも厳しい非難を浴びるようになる¹⁵。ライヒャルトの立場は微妙なものであったが、自ら編集する雑誌“Deutschland”においてプロイセンへの愛国心を明らかにしたお陰で、やがてゲーテ、シラーの誤解も解け、国王の恩赦を得てギービヒェンシュタインの製塩所長に任命されている。

このように、私生活上は大変に混乱した時期であったにも拘わらず、ライヒャルトのリート創作意欲は大変に旺盛であった。1791年から97年までの7年間に、リート曲集4冊、楽譜集1種3冊、リート叢集3種6冊、雑誌4種8巻、オペラ・ヴォーカルスコア2冊を出版し、ライヒャルト以外が編集する雑誌4種およびゲーテの小説“Wilhelm Meisters Lehrjahre”の付録として彼のリートが紹介されている。

4. 復活と再混乱

ライヒャルトは1798年にプロイセンにおける3代目の主君フリードリヒ＝ヴィルヘルム三世 Friedrich=Wilhelm III (1770-1840) によって宮廷楽長に再任されている。実際には宮廷劇場での義務がない名誉職であったが、これによって地位を回復したことになる。

この時期もリート創作に対する強い意欲を見せ、1806年までの9年間にリート曲集7種11冊、リート叢集1種2冊、雑誌1種2巻を出版している。イギリス向けのリート叢集3冊に彼の曲が載せられたのもこの時期であった。また、1802年にはパリで“Six canzonettes italiennes et six romances françaises” (未見) を出版している。

ところが1806年にナポレオン Napoléon Bonaparte (1769-1821) がプロイセンに侵攻し、ギービヒェンシュタインの邸宅もナポレオン軍に奪われてしまった。そのため、1805年から順調に号を重ねてきた雑誌“Berlinische Musikalische Zeitung” (表1: 73, 75) も発行を中止せざるを得ず、同誌で連載していた彼の自伝も中断した。1807年にはナポレオンの弟ジェローム Jérôme Bonaparte (1784-1860) からカッセル宮廷楽長への招聘があり、一時カッセルに赴任したが、再びギービヒェンシュタインに戻り、隠遁生活を送ったという。なお、ライヒャルトの後にカッセルに招聘されたのはバートーヴェン Ludwig van Beethoven (1770-1827) である。

5. 晩年

1808年になってナポレオンの目がオーストリアやロシアに向けられると、プロイセンはいっ

15 ゲーテとの確執は、シラーが主宰する雑誌“Die Horen”にゲーテが匿名で掲載した記事を、ライヒャルトがそれと知らずに非難したことが始まりであった。直前まで、ゲーテとライヒャルトの関係が良好であったということは、ライヒャルトがゲーテによる楽譜集シリーズを企画し、2曲のジングシュピール“Erwin und Elmire” (1793) と“Jery und Bätely” (1793)、そしてリート曲集“Goethes lyrische Gedichte” (表1: 38 =1794) を出版したこと、ゲーテの小説“Wilhelm Meisters Lehrjahre” (1795) の付録として6曲のリートが掲載されたことからわかる。しかし、一時的にゲーテとの不仲が発生したため、全6巻を予定していた先のシリーズも3巻までで中断してしまうことになった。もっとも、じきに和解することができ、シラーは1797年に出版した雑誌“Musenalmanach”にライヒャルトのリートを掲載している。

たん落ち着きを取り戻したようで、ライヒャルトのリート出版活動も再開されている。1809年に全128曲4巻からなる大規模なゲーテ歌曲集“Goethes Lieder, Oden, Balladen und Romanzen”（表1：76-78, 84）が計画され、同年に最初の3巻が、1年おいて11年に第4巻が出版された。この歌曲集はそれまでに書きためたものに、若干の新作を加えたものであったが¹⁶、1810年に出版された“Schillers lyrische Gedichte”（表1：80, 81）の場合は、掲載作品の多くが新作であり¹⁷、彼の創作意欲がいまだ衰えていないことを示している。そして1812年に最後の歌曲集“III Lieder”を出版した¹⁸。

1813年には自伝の執筆を再開し、雑誌“Allgemeine Musikalische Zeitung”第15・16巻に掲載されたが、完結することなく、1814年6月27日に胃腸の病気で息を引き取っている。

これらの出来事を整理すると、次のことがわかる。ライヒャルトは1773年にリートの出版活動を開始してから亡くなる直前までリートを意欲的に作り続け、出版している。その結果、およそ40年間にリート曲集を23集36冊（他に未蒐集2冊）、リートを含む（混成）楽譜集を3種6冊、リート叢集を4種8冊（他に未蒐集2冊）を出版し、これに加えて6種の雑誌を編集して付録にリートを掲載している。リート曲集と（混成）楽譜集だけを足しても平均して毎年1冊は出版していることになり、驚くべき数といえるだろう。

IV 出版地と出版社¹⁹

1. 故郷、東プロイセン

ライヒャルトの出版活動は、故郷である東プロイセンのリガで始まった。1772年に2つのジングシュピール“Hänschen und Gretchen”と“Amors Guckkasten”が1巻にまとめられて、翌73年には最初の混成曲集“Vermischte Musicalien”とヴァイオリン協奏曲（2曲）がJ.F.Hartknoch社から出されている。まさに、彼の出発点であった。もっとも、最初の器楽曲である“Clavier-Sonate”は1772年にベルリンのG.L.Winter社から出されているので、早くからベルリンとの関係を築こうとしていたと思われる。ただし、同社との関係はその後認められない。

16 第1巻は59曲中44曲が、第2巻は45曲中37曲、第3巻は11曲中8曲が再掲である。しかし、第4巻は14曲中13曲、それまで未出版の曲が収められている。いっぽう、それまでにいずれかの曲集や雑誌に掲載されながらも、《ゲーテ歌曲集》には取り上げられなかった曲が15曲あり、“EDM”59 [Salmen, 1964]に付録として掲載されている。

17 《ゲーテ歌曲集》とは異なり、《シラー歌曲集》第1巻は31曲中23曲が、第2巻にいたっては18曲中16曲が新作である。“EDM”125 [Gstrein, 2005]には掲載作の初期稿6曲と、《シラー歌曲集》に収められなかった2曲が付録として載っている。

18 “III Lieder”はライプツィヒ、マイニンツ、ブラウンシュヴァイクの3都市で出版された。

19 出版についての調査は、実物を確認できたものに加えて、RISM [Schlager, 1978]によって補った。

1783年には、生まれ故郷のケーニヒスベルクにある K.G.Dengel 社から“Kleine Klavier- und Singestücke”（表1：16）が出版されているが、彼と故郷の繋がりはいままでであった。

2. ベルリン

ライヒャルトの出版活動が最も盛んに行われたのは、ベルリンであった。前述のように、それはすでに1772年に始まるが、本格化するのには宮廷楽長着任後である。彼が関わりを持った出版業者は多く、中でも1779年から81年にかけて最初の重要な歌曲集である“Oden und Lieder” I～III（表1：7-9）を出版したPauli社、1796年から1800年にかけて、2種の雑誌“Musikalischer Almanach”（表1：46）と“Deutschland”、そして歌曲集“Gesänge der Klage und des Trostes”（表1：52）と“Lieder aus Liederspiel Lieb' und Treue”を出版したUnger社²⁰、1799年以降に歌曲集“Le Troubadour”（表1：70, 71, 73 =1805-06）や雑誌“Berlinische Musikalische Zeitung”を出版し、“Erato”シリーズの版元でもあったFrölich社が重要であろう。

しかし、より重要な位置を占め、ベルリンにおける出版活動の中核を担ったといえるのは、ライヒャルト自身が設立したNeue Berlinische Musikhandlung社を措いて他にない。彼は1782年にこの出版社から雑誌“Musikalisches Kunstmagazin”第1巻を発行している。その後しばらくは実質的な活動は行っていないように見えるが、1786年夏にフリードリヒ大王が崩御すると、大王を悼むカンタータ“Cantus lugubris in obitum Friderici Magni Borussorum Regis”とそのヴォーカルスコア“Trauercantate. Auf den Tod Friedrichs des Zweyten”を出版し²¹、さらに数年を経て、1791年から95年にかけて盛んな出版活動を行った。

1791年には“Kunstmagazin”第2巻を、そしてこの年から翌年にかけて2種類の雑誌“Musikalisches Wochenblatt”（表1：28）と“Musikalische Monatsschrift”（表1：31）を発行し、1793年から94年にかけてはゲーテによる楽譜集シリーズを企画・出版した²²。自分の意になる出版社があったということは、彼の創作・出版活動にとって大きなプラスとなったであろう。

しかし、ここで指摘しておかなければならないことがある。ライヒャルトがNeue Berlinische Musikhandlung社の名義で出版した重要な曲集の一つ“Cäcilia”第1巻（表1：25 =1790）には印刷所としてドレスデンのBreitkopf社の名が挙げられている。この時期、同社は楽譜印刷を外注していたということであろう。Breitkopf社といえば、この時代から現代に

20 1795年にゲーテがUnger社から“Wilhelm Meisters Lehrjahre”を出版し、ライヒャルトの楽譜が付録として掲載されている。その縁で、ライヒャルトもUnger社に依頼するようになったのであろう。

21 フリードリヒ大王の追悼カンタータは、“Cäcilia”各巻（表1：25 =1790, 26 =1791, 29 =1792?, 40 =1794）にも分割して掲載された。

22 [Reichardt, 1791]によれば6巻構成が計画されていたが、実際に出版されたのは2曲のジングシュピール“Erwin und Elmire”と“Jery und Bätely”、リート曲集“Goethes lyrische Gedichte”に留まった。註15を参照のこと。

至るまでドイツの主要な楽譜出版社として知られている。同社の本社はライプツィヒであるはずだが、その当時はドレスデンにも印刷工場があったと考えられる。

3. ライプツィヒ

“Cäcilia” 第1巻の印刷を Breitkopf 社に委託していたことからわかるように、当時のドイツにおける最大の楽譜出版都市であったライプツィヒとの関わりも見逃せない。

ライヒャルトとライプツィヒ出版界との関わりは1777年に Schwickert 社からチェンバロ協奏曲を出版したのが始まりであり、その後81年までの間に、同社からオペラ関連楽譜を2冊、カンタータ1曲を出版している。しかし、その後はベルリンの自身の出版社を用いることが多く、関係は薄れていた。

ライヒャルトとライプツィヒ出版界の関係が濃くなったのは、ギービヒェンシュタインに邸宅を構えてから、1796年以降であり、この年から1804年までの間に Fleischer 社から3種5冊の歌曲集“Wiegenlieder für gute deutsche Mütter”（表1：55 =1798）、“Lieder der Liebe und der Einsamkeit”（表1：56, 66 =1798/1804）、“Lieder für die Jugend”（表1：58, 59 =1799）と2種4冊のリート叢集“Lieder geselliger Freude”（表1：45, 53 =1796/97）、“Neue Lieder geselliger Freude”（表1：60, 68 =1799/1804）などを出版している²³。

ライプツィヒを代表し、現代に繋がる大手出版社ともライヒャルトは関係を結んでいる。前述のように、彼は1790年に Neue Berlinische Musikhandlung 社のための楽譜印刷を Breitkopf 社に依頼したが²⁴、1809年から11年にかけて2つの大きな歌曲集“Goethes Lieder, Oden, Balladen und Romanzen”と“Schillers lyrische Gedichte”も Breitkopf und Härtel 社を発行元として出版している。これがきっかけとなったのか、1809年から11年にかけて Breitkopf und Härtel 社が発行する音楽雑誌“Allgemeine Musikalische Zeitung”にもライヒャルトのリートを紹介する記事が掲載され、楽譜も載せられた（表1：79, 82, 85 =1809-11）²⁵。

いっぽう、もう一つの大手である C.F.Peters 社との関係は最晩年の“III Lieder”に限られるが、1805年にその前身である Hoffmeister & Kühnel 社から“Romantische Gesänge”（表1：70）を出版している。

4. ドイツ国内

ライヒャルトの出版活動は彼が関係した町だけではなく、ドイツ全国に展開しているといえるだろう²⁶。ベルリン、ライプツィヒ以外のドイツ各都市で、最も早く、そして最も多くを出

23 ライヒャルトが関わった当初は Gerhard Fleischer 社であったが、1798年以降は代替わりをして G.Fleischer d. J. 社を名乗っている。

24 Breitkopf 社に対しては、1772年に出版したジグシュビール“Hänschen und Gretchen”等の販売委託も行っているため、極めて早い時期から交流があったということがわかる。

25 ライヒャルトは1801年以降、シュルツの追悼記事を始めとして様々な記事を“AMZ”に寄稿している。

26 たとえば1782年に出版した“Oden und Lieder”（表1：13）はシュレジア地方グロットカウから出版さ

版したのはハンブルクとその近郊都市であり、1781年の“Lieder für Kinder”第1巻、第2巻を皮切りに、リート、合唱曲を中心とした数十点が認められる²⁷。“Lieder für Kinder”は第3巻、第4巻（表1：20 =1787, 23 =1790）の出版に手間取ったようで、出版地もヴォルフエンビュッテルとブラウンシュヴァイクに移されている。以降、1795年頃までの間に、ヴァイマール、ゴータ（いずれも表1：19 =1784）、ダルムシュタット、オッフエンバッハ等で出版活動が展開された。出版されたジャンルは、リートが圧倒的に多く、北ドイツ中心の文化であったリート創作活動がドイツ全域に広がっていく様を示している。

1795年以降、ライヒャルト自身の生活の混乱とナポレオン戦争の影響であろうか、ドイツ各地での出版はいったん下火になる。しかし、最晩年の1812年にはマインツのB.Schott社が“III Lieder”を出版し、さらに1814年にはミュンヘンで出された雑誌“Nachrichten von dem deutschen Schulwesen im Königreiche Bayern”第2巻にライヒャルトの歌曲が掲載された模様である。残念ながら最後の雑誌は未見だが、南ドイツにまで彼のリート作品が広まったということを示している。

5. ドイツ国外

ライヒャルトの作品は、スイスのチューリヒとヴィンタートーンで1783年に出版された雑誌“Sammlung zu einem Christlichen Magazin”第2巻第2号（表1：15）に“Lob des Herrn”が、第4巻第2号（表1：17）に“Gemeinschaftliches Gebethlied”が掲載されたのを手始めに、ドイツ国外でも数多く出版されている。チューリヒでは1790年にも“Geistliche Lieder”（表1：24）が出版された。これらはおそらく、プロテスタントの相互交流によるものであろう。

イギリスでは1800年以降²⁸、6社がライヒャルトのリート（いずれも単独出版）あるいは器楽曲を出版している。フランスでもパリの3社がライヒャルトの作品を出版した。パリではリートよりも器楽曲の方が人気があったようであるが、1802年に“Six canzonettes italiennes et six romances françaises”を出版していることは既に述べたとおりである。さらに、デンマークでリートが、オランダで器楽曲が、ロシアでは合唱曲が出版されているが、いずれも出版年代は不明である。

れている。シュレジアは現在ポーランド領であるが、当時はプロイセン領であった。したがって、「ドイツ国内」を当時の国境線に従って考えることにする。

27 ハンブルクの主要な出版元はBöhme社（リート）、Cranz社（合唱曲とリート）、Herold社（リート）、Rudolphus社（リート）、Vollmer社（リート）などであり、リートの単独出版が多い。

28 1798年にベルリンのFrölich社が英語訳のリート集“The German Erato”のシリーズを出版したことが呼び水となったのであろう。

V 楽譜の書式²⁹

次に、今回蒐集した楽譜の外的な特徴、楽譜書法について考えることにしよう。その際に指標となるのは拙稿『伴奏の成立』[村田, 1983]でも示したように、「音部記号」と「五線の段数」の2点であるが、今回はさらに「使用文字」と「使用言語」にも注目することにしたい。

1. 五線の段数

現代において歌曲は3段譜表、歌唱旋律のための五線1段とピアノのための大譜表(2段)を用いて書き記すことが多いが、18世紀のドイツにおいてはむしろ、2段譜表を用いることが一般的であった。一口に2段譜表といっても2種類ある。世紀半ばまでは歌唱旋律と通奏低音(数字低音付)のための2段であり(上段、下段とも単旋律)、世紀半ば以降は実際に演奏する音をすべて書き表した楽譜に変わっている。後者を「クラヴィーア・リート」と呼ぶ。

18世紀後半の啓蒙主義的、教育的なリートは誰にでも歌えることを目指しているため、旋律構成や形式も単純なものであり、伴奏の最上声が歌唱旋律を常になぞっていくということが特徴であった。つまり、旋律が伴奏から独立していない、あるいは伴奏が旋律から独立していないということになり、そのような状態では伴奏右手のための大譜表上段と歌唱旋律の五線を分けて書く必要がない。つまり大譜表上段に歌唱旋律と伴奏右手が合わせて書かれることになる。これが2段譜表によるクラヴィーア・リートである。

ライヒャルトの場合、1800年までの出版物では一貫して二段譜表によるクラヴィーア・リートの形で書かれており、1804年の“Lieder der Liebe und der Einsamkeit”第2巻以降は三段譜表が用いられている(表2:各年最上段の網掛け)。『伴奏の成立』[村田, 1983]でも示したように、伴奏の最上声が歌唱声部をなぞり旋律を補うのではなく、独立した伴奏の機能を求めた結果であると考えられる³⁰。

1809年のみ、二段譜表を用いる率がやや高いが(107曲中43曲)、これは《ゲーテ歌曲集》に旧作の再掲が多いことを反映しているからである。

2. 音部記号

12世紀に譜線を用いて音高を明確に示すことが始まって以来、用いられる音部記号はハ音

29 表2「ライヒャルト：リート楽譜出版の経緯と楽譜書法の変遷」を参照願いたい。表1をもとに、楽譜書法の変遷を視覚化した。

30 ライヒャルトが初めて三段譜表を用いたのは1779年の“Oden und Lieder”第1巻であるが、そこには現在一般的となっているものとは異なる構造の三段譜表が載せられている。『伴奏の成立』[村田, 1983: 178]で詳述したのでここではこれ以上触れないが、テレマン Georg Philipp Telemann (1681-1767)の“Singe-, Spiel- und Generalbaß-Übungen”(1733-34)にも同様の書法が見られることを付け足しておく。テレマンの場合は通奏低音奏法の実施例を示すためであると考えられる。

記号とヘ音記号が中心であった。例えばバッハ Johann Sebastian Bach (1685-1750) は、鍵盤音楽はソプラノ譜表（第1線上のヘ音記号）とバス譜表（第4線上のヘ音記号）に記し、合唱の上3声もヘ音記号（ソプラノ譜表、アルト譜表、テノール譜表。もちろんバスはバス譜表）で示している。独唱声楽曲の場合もソプラノ譜表に記すことが多く、ライヒャルトのリートも、1795年までは全てヘ音記号のソプラノ譜表によって記譜されていた。ところが1796年に突然、ト音記号（第2線上）の使用が見られ、97年以降はヘ音記号の使用は1曲も認められない（表2：各年中段の網掛け）³¹。

確かに19世紀になると、いかなる曲種であろうと、中高音のためにはほとんどの楽譜がト音記号（現在と同じ第2線上）を用いるようになるので³²、それと同じ動きであると見なすことができるが、ライヒャルトの場合、なぜ1796年に突然変化したのか、その理由は分からない。

3. 使用文字と使用言語

歌詞あるいは曲想を表示するために用いる文字も、時代を追って変化している。

ライヒャルトは最初の出版楽譜である“Hänschen und Gretchen”において、髭文字（亀の子文字 Fraktur）を使用している。このジングシュピールでは表紙の標題や配役表はもとより、歌詞も全て髭文字で書かれている。数少ない例外は、Allegro や crescendo などのイタリア語に由来する音楽用語であり、これらに限ってラテン文字を用いている。

それ以降、1773年の“Vermischte Musicalien”を見てもわかるように、ドイツ語リート之歌詞や曲想は髭文字、イタリア語アリアと器楽曲はラテン文字というように、使い分けるといのが彼のやり方だった。この方法は1790年の“Lieder für Kinder”第4巻まで続いている。

同じく1790年に出版した“Geistliche Lieder”と“Cäcilia”第1巻から変化が見られる。この2冊の出版譜から、歌詞も曲想も全てラテン文字を用いるようになっていたのだ。その後、1796年に出版した雑誌“Deutschland”を数少ない例外として、彼自身が編集出版する楽譜に髭文字が用いられることはほとんどなくなる（表2：各年最下段の網掛け）。

ドイツ全体を見た場合、20世紀初頭に至るまで髭文字の使用が続いているのにも拘わらず、ライヒャルトがいち早くラテン文字の使用を始めたのは、音楽（楽譜）の国際性を考えてのことだと推測できる。19世紀になると、他の人（例えばベートーヴェンやシューベルト Franz Schubert (1797-1828) など）の楽譜においても、歌詞、曲想ともにラテン文字が使われるよ

31 1796年にはヘ音記号とト音記号の両方が用いられているように見えるが、この年に出版された52曲中、ヘ音記号で書かれているのはライヒャルトの編集による“Musikalischer Almanach”に収められた12曲とシラーの編集による“Musen-Almanach”の6曲（他にヘ音記号が1曲），“Deutschland”第3巻の“Mignons letzter Gesang”だけである。“Musikalischer Almanach”は1796年出版となっているが、「年鑑」という性格から考えると、前年末、どんなに遅くとも年明け早々に出版されているはずであるから、実際の出版は95年と考えるべきであろう。そうすると、ライヒャルト自身が出版した96年の作品でヘ音記号によるのは1曲だけということになり、95年と96年の間に溝があると考えても良いだろう。

32 これは、「高音への嗜好」と「楽譜の簡素化」という言葉で捉えることができるだろう [村田, 2016:49f.]。

うになる。

最後に、使用言語についても触れておこう。曲想標語にドイツ語を用いることは、ベートーヴェンあたりから始まったと考えることが多い。確かに彼のピアノ・ソナタ各楽章冒頭の曲想標語を見ると、op.90 ホ短調（1815年出版）で初めてドイツ語が用いられており、その後、op.101 イ長調、op.109 ホ長調、op.110 変イ長調に見られる。ところがライヒャルトは彼のリートにおいて一貫してドイツ語による曲想表示を行っている。器楽曲やイタリア語歌詞の歌曲の場合はイタリア語を用いているので、さきの髭文字とラテン文字の使い分け同様、言語も使い分けていることがわかる。「誰にでも歌える（＝理解できる）」という考え方の名残（外国語が理解できなくとも歌える）ではないだろうか〔村田, 2016: 50f.〕³³。

VI 各歌曲集の性格

最後に各曲集の性格と、そこに納められている曲の特徴について検討しよう。

ライヒャルトの歌曲は、「1. 誰にでも歌える歌曲（民謡調リート）の追求」、「2. 芸術リートへの道」、「3. 各国語による国際展開」、「4. 創作の集大成」という4つの性格によって整理できる。ただし、ここでは曲集を単位としてその性格を大まかに区分するに留め、各曲集についての踏み込んだ検討は今後の稿に譲る。また、原則として個々の曲には言及しないことにする。

1. 「誰にでも歌える歌曲（民謡調リート）」の追求（ベルリン・リート楽派の伝統）

先にも述べたように、ベルリン・リート楽派の創作理念は、音楽を教育に役立たせることであり、「誰にでも歌える」ということが大切であった。それは、①広すぎない音域に留まり、分かりやすい音程と単純なリズムをもった歌いやすい旋律、②同一の音楽を繰り返しながら歌詞を変えていく有節形式、③伴奏が旋律をなぞり支えていくクラヴィエー・リートという3つの特徴に現れている。ライヒャルトとシュルツはこれを「民謡調」という言葉で説明した。

ライヒャルトもこれら3つの特徴を備えた歌曲を数多く作っている。それは“Gesänge fürs schöne Geschlecht”（表1:4 =1775）や“Wiegenlieder für gute deutsche Mütter”のように、女性や母親のためとされ、あるいは“Lieder für Kinder”や“Lieder für die Jugend”にみられるように、子どもや若者のためを名乗ることが多い³⁴。また、“Geistliche Lieder”のように賛

33 ベートーヴェンは歌曲でもドイツ語による曲想表示を行うことがあるが、ドイツ語とイタリア語を使い分けているようには見られない。また、シューベルトの場合はピアノ曲においてドイツ語を用いることはなく、歌曲の場合は多くがドイツ語によっているが、一貫しているわけでもないし、使い分けているようにも見られない。

34 未蒐集の“Frohe Lieder für deutsche Männer”もこのグループに入れることができるであろう。

美歌という性格を持つ場合もある。

一年分の愛唱歌を集めて、1792年から97年まで毎年1冊ずつ出版していったリート叢集“Musikalischer Blumenstrauß”（表1：30, 32, 39 =1792-94）、“Musikalische Blumenlese”（表1：41 =1795）、“Lieder geselliger Freude”（1796-97）、さらに“Musikalischer Almanach”（1796）や“Neue Lieder geselliger Freude”（1799, 1804）も同じ趣旨の曲集だといえる。

これらの民謡調リートは1790年からの10年余りの間に集中的に出版され、ほぼ例外なく、クラヴィア・リート（二段譜表）の有節歌曲であり³⁵、しばしば「合唱として歌うことも可 auch im Chor zu singen」という但し書きが付されている。共に歌い楽しむことを推奨していると考えられるだろう。そしてこれらの曲集が教育的性格を持っているということは、“Lieder für Kinder”第3巻、第4巻が教科書販売会社である Schulbuchhandlung 社から発売されているという点にも現れている。

2. 「芸術リート」への道

ライヒャルトは第一次ベルリン・リート楽派の理念を受け継ぎながらも、最初期から、新しい芸術リートへの道を模索していたといえる。最初の本格的歌曲集である“Oden und Lieder”にまずその傾向が見られる³⁶。彼は第2巻（1780）の序文でリートの理想像について、「私の旋律は常に、私がそれを求めなくとも、詩を繰り返し読むことから自然に生まれてくる³⁷」と述べ、詩の朗読から生まれる自然な旋律の価値を称揚している。

「芸術リート」への道を意識したと思われる曲集として、“Lieder von Gleim und Jacobi”（表1：19 =1784）、“Deutsche Gesänge”（表1：22 =1788）、“Deutsche Gesänge beim Clavier”（表1：37 =1794）、“Goethes lyrische Gedichte”（表1：38 =1794）、“Gesänge der Klage und des Trostes”、“Lieder der Liebe und der Einsamkeit”、“X II Deutsche Lieder”（表1：62 =1800）、“Romantische Gesänge”、“Schillers lyrische Gedichte”、“III Lieder”などの名が挙げられる。なかでも、1788年の“Deutsche Gesänge”は最初の「朗誦歌曲」[村田, 1982: 159f.]を取めた曲集として重要だと考える。また、1794年の“Goethes lyrische Gedichte”以降は題名に曲集の性格を表す形容詞（lyrisch, romantisch）や内容を示す名詞（Klage, Trost, Liebe, Einsamkeit）が用いられているという点も特徴であろう。第1種の民謡調リートが特定の時期に集中していたのに対し、第2種の芸術リートは最初期の1779年から最晩年の1812年まで、数年おきに出版されており、あまり集中が見られない。

35 わずかな例外として、“Lieder für Jugend”第2巻に2曲、“Neue Lieder geselliger Freude”第2巻に6曲の三段譜表の曲が収められている。

36 同じ“Oden und Lieder”という題名で1782年に出版された曲集（表1：13）はシュレジア地方グロツトカウの教科書販売会社から出版されており、第1種の「誰にでも歌える歌曲」との共通点も認められるが、やはり「芸術リート」のグループに入れることができると考える。なお、「第4巻」とは明記されていない。

37 [Reichardt, 1780]。拙稿『音楽的朗誦の概念の成立』[村田, 1982: 167f.]等でも指摘したが、この序文は1779年出版の第1巻序文と混同されることが多いので、注意が必要である。

3. 「各国語による国際展開」

先にも述べたように、ライヒャルトはドイツ語のみならず、フランス語やイタリア語も歌詞として用いている。最初期の“Gesänge fürs schöne Geschlecht”にはイタリア語歌曲4曲とフランス語歌曲1曲が収められているし、1783年の“Kleine Klavier- und Singestücke”にもイタリア語歌曲2曲とフランス語歌曲3曲が収められている。さらに、フランス語あるいはイタリア語の歌詞を持つ歌曲だけを収めた“Romances d'Estelle par M.Florian”（表1：36 =1794）、“Douze Elegies et Romances”（表1：67 =1804）、“Sonetti e Canzoni di Petrarca”（表1：87 =o.J.）、伊仏2ヶ国語による“Six canzonettes italiennes et six romances françaises”（未見）、独仏伊三ヶ国語を扱った“Le Troubadour”が存在する。ライヒャルトの音楽がヨーロッパ各国で出版されていることと合わせて、彼の国際的な活躍を表すものといえよう。

4. 創作の集大成

そして、1809年から11年にかけて、第1種「誰にでも歌える歌曲」と第2種「芸術リート」を集大成するものとして、“Goethes Lieder, Oden, Balladen und Romanzen”全4巻が出版された。先にも述べたように、《ゲーテ歌曲集》の最初の2巻は再掲曲が多く、第1種の要素が強いが、同第3巻、第4巻は新作が多く、第2種の傾向が強い。第3種「各国語による国際展開」だけはこの歌曲集と無関係なように見えるが、ゲーテはイタリア語詩“Notturmo (Nachtgesang)”を作っており、第1巻39番として独伊両国語を歌詞とした楽譜が掲載されているので、第3種の要素も含んでいるといえる。

おわりに

以上、ライヒャルトのリート創作・出版の軌跡を追ってきた。紙幅の都合上、各曲集について解題することも、個々の曲に言及することもできなかったが、彼の活動の特徴とその意味を明らかにすることはできたであろう。ライヒャルトのリート創作活動は、第一次ベルリン・リート楽派の伝統を受け継ぐ「民謡調リート」と、19世紀に花開くことになる「芸術リート」という、異なる2つのジャンル双方に目を配り、そのバランスを取りながら展開されたものである（国際性も視野に入れ、3要素のバランスと考えるべきでもあろう）。現在でこそ、シューベルト以前のリートとして一括されてしまいがちではあるが、彼が求めた新しいリート理念を紐解いていくことは、「芸術リート」誕生のプロセスを解き明かすためには必須のことである。各曲集の内容と性格、個々の曲について検討を加え、ライヒャルト・リートの全体像を探ることを今後の課題としたい。

（本学教授 = 音楽学担当）

一次資料

- Koch, Heinrich Christoph 1802 Art. 'Liederspiel' "Musikalisches Lexikon" Sp.904-907.
- Reichardt, Johann Friedrich 1779 'Ein guter Rath statt der Vorrede' "Oden und Lieder",
Berlin: Joachim Pauli.
- 1780 'Auch ein guter Rath statt der Vorrede' "Oden und Lieder: Zweyter Theil" Berlin:
Joachim Pauli.
- 1782a 'An junge Künstler' "Musikalisches Kunstmagazin" I S.1-7.
- 1782b 'Ueber Klopstocks komponirte Oden' "Musikalisches Kunstmagazin" I S.22-23,
62-63.
- 1782c 'Volkslieder' "Musikalisches Kunstmagazin" I S.99-100, 154-156.
- 1782d 'Chronologisches Verzeichnis' "Musikalisches Kunstmagazin" I S.207-209.
- 1791 'Fortgesetztes chronologisches Verzeichnis' "Musikalisches Kunstmagazin" II
S.124-126.
- 1805 'Autobiographie' "Berlinische musikalische Zeitung" I
Sp.215-222, 255-260, 279-281, 309-314, 323-325, 331-334, 351-354.
- 1813 'Autobiographie' "Allgemeine musikalische Zeitung" X V Sp.601-616, 633-642, 665-
674.
- 1814 'Autobiographie' "Allgemeine musikalische Zeitung" X VI Sp.21-34.
- anonim 1814 'Nekrolog' "Allgemeine musikalische Zeitung" X VI Sp.458-459.

(使用楽譜については表1「ライヒャルト：出版楽譜一覧」を参照されたい)

表1 ライヒャルト：出版楽譜一覧

EDM = Das Erbe deutscher Musik
 IA = The Internet Archive
 IMSLP = The International Music Score Library Project (Petrucci Music Library)
 RISM = Répertoire International des Sources Musicales

凡

- | | |
|----------------------|----------------------|
| 1. 「リート曲集」(ライヒャルト単独) | 2. 「楽譜集」(ライヒャルト単独) |
| 3. 「リート叢集」(ライヒャルト編集) | 4. 「リート叢集」(ライヒャルト以外) |
| 5. 「雑誌付録」(ライヒャルト編集) | 6. 「雑誌付録」(ライヒャルト以外) |
| 7. 「書籍付録」 | 8. 「オペラ・ヴォーカルスコア」 |
| 9. 「単独出版」 | |

備考には、オペラ等の作者、雑誌編集者、リート叢集の他の作曲家、《ゲータ歌曲集》の各巻副題、その他特記事項を記した。

番号	曲 集 名 等		出版年	出 版 地 : 出 版 社		RISM
	概 要		(頁数、曲数、譜表、文字)			序文
	分 類	現 代 版	備 考			
1	"Hänschen und Gretchen" (Operetta)		1772	Riga; J.F.Hartknoch		R805
	15 曲中 9 曲 (他に序曲 1 曲、二重唱 2 曲、3 重唱 1 曲、5 重唱 1 曲、終曲)、C クレフ 2 段、髭文字					
2	8. 「オペラ・ヴォーカルスコア」 IMSLP		J.G.Bock 台本			
	"Amors Guckkasten" (Operetta)		1772	Riga; J.F.Hartknoch		R805
3	20 曲中 16 曲 (他に序曲 1 曲、二重唱 1 曲、3 重唱 1 曲、終曲)、C クレフ 2 段、髭文字					
	8. 「オペラ・ヴォーカルスコア」 IMSLP		J.B.Michaelis 台本			
4	Vermischte Musicalien		1773	Riga; J.F.Hartknoch		R871
	74 頁、7 曲 (他に器楽 7 曲、アリア 1 曲)、C クレフ 2 段、髭文字 (器楽、アリアはラテン文字)		Vorbericht			
5	2. 「楽譜集」(ライヒャルト単独) IMSLP					
	Gesänge fürs schöne Geschlecht		1775	Berlin: F.W.Birnstiel		R845
6	40 頁、独語 21 曲、伊語 1 曲、C クレフ 2 段、髭文字 (伊仏はラテン文字)		Nachricht			
	1. 「リート曲集」(ライヒャルト単独)					
7	Göttinger Musenalmanach VI		1775	Göttingen: Johann Christian Dieterich		-
	1 曲、C クレフ 2 段、髭文字 (筆記体)					
8	6. 「雑誌付録」(ライヒャルト以外) Hildesheim 1979		Boie 編			
	Eyn feyner kleyner Almanach II		1778	Berlin: Friedrich Nicolai		-
9	1 曲、C クレフ 1 段、髭文字					
	6. 「雑誌付録」(ライヒャルト以外) Hildesheim 1985		Seuberlich 編			
10	Oden und Lieder I		1779	Berlin: J.Pauli		R872
	48 頁、42 曲、C クレフ 2 段 (3 段 4 曲)、髭文字		Vorrede			
11	1. 「リート曲集」(ライヒャルト単独) IMSLP					
	Oden und Lieder II		1780	Berlin: J.Pauli		R873
12	53 頁、33 曲、C クレフ 2 段 (3 段 6 曲)、髭文字		Vorrede			
	1. 「リート曲集」(ライヒャルト単独) IMSLP					
13	Oden und Lieder III		1781	Berlin: J.Pauli		R874
	45 頁、24 曲 (他に Duett 1 曲、Juliane Reichardt 1 曲)、C クレフ 2 段 (3 段 5 曲)、髭文字					
14	1. 「リート曲集」(ライヒャルト単独)					
	Lieder für Kinder I		1781	Hamburg: Herold		R863
15	56 頁、56 曲、C クレフ 2 段、髭文字		Nachricht			
	1. 「リート曲集」(ライヒャルト単独) IMSLP					
16	Lieder für Kinder II		1781	Hamburg: Herold		R863
	48 頁、46 曲、C クレフ 2 段、ドイツ文字		An die Jugend			
17	1. 「リート曲集」(ライヒャルト単独)					
	Gedichte von Rudolphi		1781	Berlin: A.Mylius		R882
18	208 頁、9 曲 (他に Juliane Reichardt 3 曲)、C クレフ 2 段、髭文字		無題			
	7. 「書籍付録」					
19	Oden und Lieder		1782	Grottkau: Evangelische Schulanstalt		R875
	44 頁、29 曲 (内オペラ終曲 1 曲 = 4 段)、C クレフ 2 段 (3 段 2 曲)、髭文字		Vorbericht			
20	1. 「リート曲集」(ライヒャルト単独)					
	Musikalisches Kunstmagazin I		1782	Berlin: Neue Berlinische Musikhandlung		-
21	11 曲 (他に合唱 6 曲)、C クレフ 2 段 (3 段 2 曲)、髭文字					
	5. 「雑誌付録」(ライヒャルト編集) Hildesheim 1969/IMSLP					
22	Sammlungen zu einem Christlichen Magazin II		1782	Zürich/Wintertur: J.K.Füßli		-
	1 曲、C クレフ 2 段、髭文字					
23	6. 「雑誌付録」(ライヒャルト以外)					
	Kleine Klavier- und singestücke		1783	Königsberg: K.G.Dengel		R849
24	46 頁、独語 16 曲、仏語 3 曲 (1 曲は独語併記)、伊語 2 曲 (他にピアノ 16 曲)、C クレフ 2 段、髭文字 (伊仏はラテン文字)					
	2. 「楽譜集」(ライヒャルト単独)		仏 3 曲中 1 曲は独語併記、伊仏器楽はラテン文字			

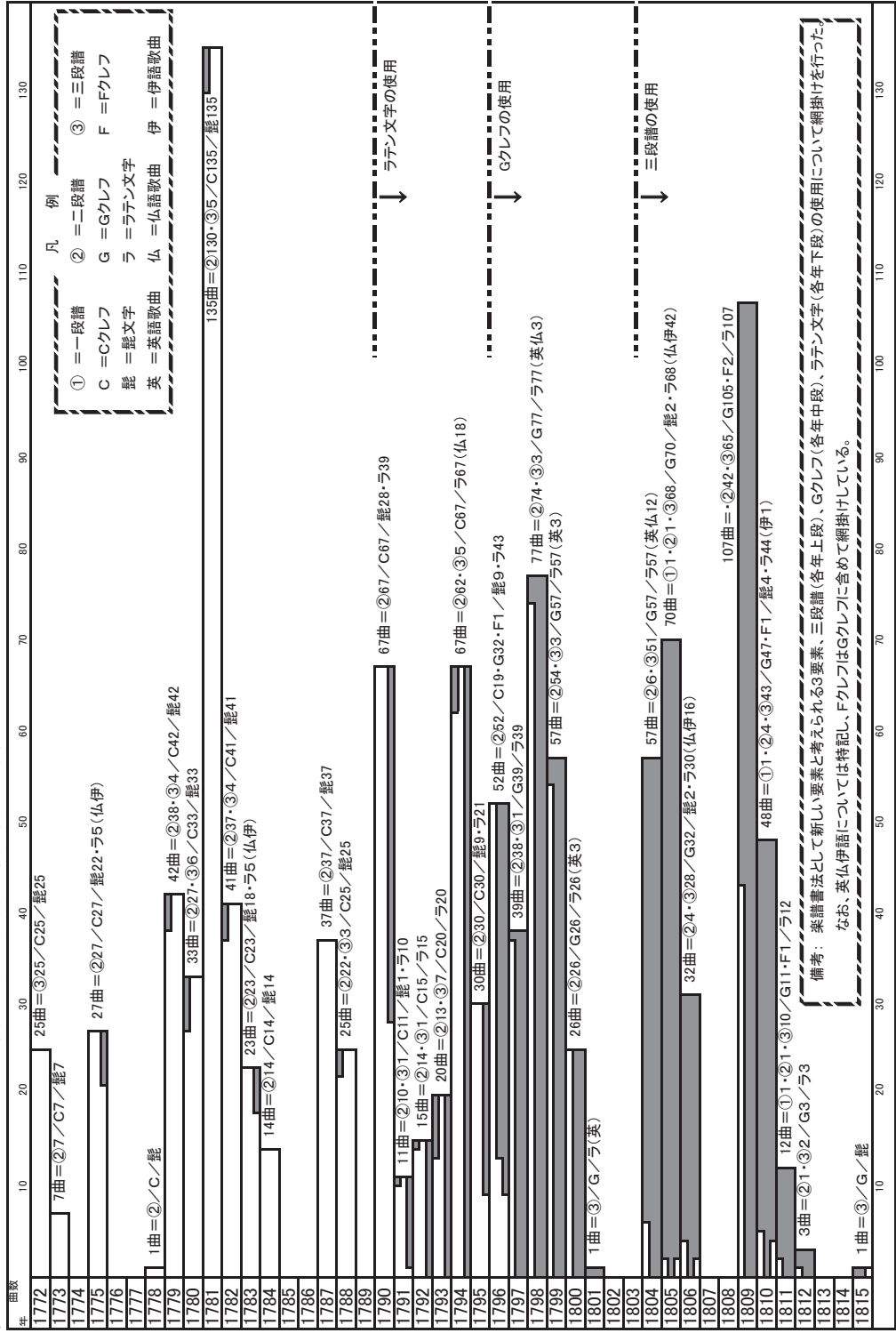
番号	曲集名等		出版年	出版地：出版社		RISM
	概要		(頁数、曲数、譜表、文字)			序文
	分類	現代版	備考			
17	Sammlungen zu einem Christlichen Magazin IV		1783	Zürich/Winterthur: J.K.Füßli		-
	1曲、Cクレフ2段、髭文字					-
18	Berlinische Monatsschrift I		1783	Berlin: Haude und Spener		-
	1曲、Cクレフ2段、髭文字					-
19	Lieder von Gleim und Jacobi		1784	Weimar: C.J.L.Glüsing / Gotha: Ettinger		R855
	20頁、14曲、Cクレフ2段、髭文字					
20	Lieder für Kinder III		1787	Wolfenbüttel: Schulbuchhandlung		R865
	52頁、36曲、Cクレフ2段、髭文字					
21	Thalia		1787	Leipzig: Georg Joachim Göschen		-
	1曲、Cクレフ2段、髭文字					-
22	Deutsche Gesänge		1788	Leipzig: G.J.Göschen		R843
	33頁、25曲、Cクレフ2段(3段3曲)、髭文字					Vorbericht
23	Lieder für Kinder IV		1790	Braunschweig: Schulbuchhandlung		R866
	40頁、28曲、Cクレフ2段(4声1曲=C2およびC4)、髭文字					
24	Geistliche Lieder		1790	Winterthur: Steiner & Co.		R853
	36頁、24曲、Cクレフ2段、ラテン文字					
25	Cäcilia I		1790	Berlin: Neue Berlinische Musikhandlung		R830
	36頁、15曲(他に宗教曲6曲)、Cクレフ2段、ラテン文字					Vorbericht
26	Cäcilia II		1791	Berlin: Neue Berlinische Musikhandlung		R831
	36頁、8曲(他に宗教曲6曲)、Cクレフ2段、ラテン文字					Vorbericht
27	Musikalisches Kunstmagazin II		1791	Berlin: Neue Berlinische Musikhandlung		-
	1曲(他に合唱2曲)、Cクレフ3段、髭文字					-
28	Musikalisches Wochenblatt		1791	Berlin: Neue Berlinische Musikhandlung		-
	2曲、Cクレフ2段、ラテン文字					-
29	Cäcilia III		1792?	Berlin: Neue Berlinische Musikhandlung		R832
	34頁、8曲(他に宗教曲2曲)、Cクレフ2段(1曲3段)、ラテン文字					
30	Musikalischer Blumenstrauß I		1792	Berlin: Neue Berlinische Musikhandlung		-
	40頁、16曲中5曲、Cクレフ2段、ラテン文字					
31	Musikalische Monatsschrift		1792	Berlin: Neue Berlinische Musikhandlung		-
	2曲、Cクレフ2段、ラテン文字					-
32	Musikalischer Blumenstrauß II		1793	Berlin: Neue Berlinische Musikhandlung		-
	46頁、22曲中7曲、Cクレフ2段、ラテン文字					
33	Berlinische Musikalische Zeitung		1793	Berlin: Neue Berlinische Musikhandlung		-
	4曲、Cクレフ2段、ラテン文字					-
34	"Erwin und Elmire" (Singspiel)		1793	Berlin: Neue Berlinische Musikhandlung		R796
	16曲中4曲、Cクレフ2段2曲3段2曲、ラテン文字					-
35	"Jery und Bätely" (Singspiel)		1793	Berlin: Neue Berlinische Musikhandlung		R807
	13曲中5曲(序曲1曲、二重唱4曲、3重唱2曲、終曲)、Cクレフ3段、ラテン文字					
36	Romances d'Estelle par M.Florian		1794	Berlin: Neue Berlinische Musikhandlung		R876
	34頁、18曲(全曲仏語)、Cクレフ2段、ラテン文字					

番号	曲 集 名 等		出版年	出版地：出版社	RISM
	概 要		(頁数、曲数、譜表、文字)		序文
	分 類	現 代 版	備 考		
37	Deutsche Gesänge beim Clavier 32頁、15曲、Cクレフ2段、ラテン文字		1794	Berlin: Neue Berlinische Musikhandlung	R844
	1. 「リート曲集」(ライヒャルト単独) IMSLP				
38	Goethes lyrische Gedichte 40頁、30曲、Cクレフ2段(3段5曲)、ラテン文字		1794	Berlin: Neue Berlinische Musikhandlung	R837
	1. 「リート曲集」(ライヒャルト単独)				
39	Musikalischer Blumenstrauß III 32頁、15曲中4曲、Cクレフ2段、ラテン文字		1794?	Berlin: Neue Berlinische Musikhandlung	-
	3. 「リート叢集」(ライヒャルト編集)		Gluck, Grönland, Halter, Horstig, Kunzen, Schlessner, Seidel=2, Spazier, Wessely, Zelter		
40	Cäcilia IV 32頁、16曲(他に宗教曲2曲、合唱1曲)、Cクレフ2段、ラテン文字		1795	Berlin: Neue Berlinische Musikhandlung	-
	2. 「楽譜集」(ライヒャルト単独) IMSLP				
41	Musikalische Blumenlese 32頁、18曲中5曲、Cクレフ2段、ラテン文字		1795	Berlin: Neue Berlinische Musikhandlung	-
	3. 「リート叢集」(ライヒャルト編集)		Gluck, Grönland, Kunzen, Seidel=3, Spazier=2, Wessely=2, Zelter=2, anonim		
42	Die Horen III 2曲、Cクレフ2段、髣文字		1795	Tübingen: J.G.Cotta	-
	6. 「雑誌付録」(ライヒャルト以外) Stuttgart 1959		Schiller 編		
43	Gedichte von Friedrich Wilhelm August Schmidt 1曲、Cクレフ2段、髣文字		1795	Berlin: C.Spener	-
	6. 「雑誌付録」(ライヒャルト以外)				
44	Goethe "Wilhelm Meisters Lehrjahre" 6曲(内二重唱1曲)、Cクレフ2段、髣文字		1795	Berlin: J.F.Unger	R870
	7. 「書籍付録」 Frankfurt/M 1980				
45	Lieder geselliger Freude I 120頁(楽譜は挟み込み)、50曲中24曲、Gクレフ2段、ラテン文字		1796	Leipzig: Gerhard Fleischer	-
	3. 「リート叢集」(ライヒャルト編集)		Hliier, Kunzen=3, Naumann=2, Seidel=2, Schulz=12, Schwenke=2, Seidemann, Spazier=2, Zelter		
46	Musikalischer Almanach 196頁(楽譜は挟み込み、12曲、Cクレフ2段、ラテン文字)		1796	Berlin: Johann Friedrich Unger	-
	5. 「雑誌付録」(ライヒャルト編集) IA				
47	Deutschland I 2曲、Gクレフ2段、髣文字		1796	Berlin: J.F.Unger	-
	5. 「雑誌付録」(ライヒャルト編集) Leipzig 1989/IA				
48	Deutschland II 3曲、Gクレフ2段、髣文字		1796	Berlin: J.F.Unger	-
	5. 「雑誌付録」(ライヒャルト編集) Leipzig 1989/IA				
49	Deutschland III 2曲、G/Cクレフ2段、髣文字		1796	Berlin: J.F.Unger	-
	5. 「雑誌付録」(ライヒャルト編集) Leipzig 1989/IA				
50	Deutschland IV 2曲、Gクレフ2段、髣文字		1796	Berlin: J.F.Unger	-
	5. 「雑誌付録」(ライヒャルト編集) Leipzig 1989/IA				
51	Musen Almanach 7曲、Gクレフ2段(Cクレフ1曲、Fクレフ1曲)、ラテン文字		1796	Neustrelitz: Hofbuchhändler Michaelis	-
	6. 「雑誌付録」(ライヒャルト以外) Hildesheim 1969		Schiller 編		
52	Gesänge der Klage und des Trostes 26頁、12曲、Gクレフ2段、ラテン文字		1797	Berlin: J.F.Unger	R846
	1. 「リート曲集」(ライヒャルト単独) IMSLP				
53	Lieder geselliger Freude II 144頁(楽譜は挟み込み)、50曲中24曲、Gクレフ2段、ラテン文字		1797	Leipzig: Gerhard Fleischer	-
	3. 「リート叢集」(ライヒャルト編集)		Fleischer, Kunzen=3, Naumann=2, Schulz=10, Schuster=2, Schwenke=2, Seidel, Spazier=2, Zelter=2		
54	Musen Almanach 3曲、Gクレフ2段(3段1曲)、ラテン文字		1797	Neustrelitz: Hofbuchhändler Michaelis	-
	6. 「雑誌付録」(ライヒャルト以外) Hildesheim 1969		Schiller 編		
55	Wiegenlieder für gute deutsche Mütter 40頁(楽譜は挟み込み)、20曲(仏語1曲、英語1曲)、Gクレフ2段、ラテン文字		1798	Leipzig: G.Fleischer d.J.	R880
	1. 「リート曲集」(ライヒャルト単独)				
56	Lieder der Liebe und der Einsamkeit I 82頁、53曲、Gクレフ2段(3段3曲)、ラテン文字		1798	Leipzig: G.Fleischer d.J.	R867
	1. 「リート曲集」(ライヒャルト単独) Serauky/IMSLP/Kemel				

番号	曲集名等		出版年	出版地：出版社		RISM
	概要		(頁数、曲数、譜表、文字)			序文
	分類	現代版	備考			
	The German Erato		1798	Berlin: G.C.Nauk		-
57	34頁、15曲中4曲(英訳)、Gクレフ2段、ラテン文字					-
	4.「リート叢集」(ライヒャルト以外)IMSLP					
	Lieder für die Jugend I		1799	Leipzig: G.Fleischer d.J.		R862
58	42頁、20曲、Gクレフ2段、ラテン文字					Vorrede
	1.「リート曲集」(ライヒャルト単独)			伴奏指遣い		
	Lieder für die Jugend II		1799	Leipzig: G.Fleischer d.J.		R862
59	44頁、20曲、Gクレフ2段(3段2曲)、ラテン文字					
	1.「リート曲集」(ライヒャルト単独)			伴奏指遣い		
	Neue Lieder geselliger Freude I		1799	Leipzig: Gerhard Fleischer J.		-
60	76頁(楽譜は挟み込み)、25曲中14曲、Gクレフ2段、ラテン文字					
	3.「リート叢集」(ライヒャルト編集)IMSLP			Bornhard, Gabler, Himmel, Kunzen=2, Naumann, Schulz, Rust=2, Zelter=2		
	A Collection of German Ballads and Songs		1799	Berlin: Frölich		-
61	32頁、8曲中3曲(英訳)、Gクレフ2段2曲3段1曲、ラテン文字					-
	4.「リート叢集」(ライヒャルト以外)IMSLP			"The German Erato" シリーズ2		
	Lieder aus Liederspiel Lieb' und Treue		1800	Berlin: Lischke / Berlin: Unger / Petersburg: Concha		R808
62	19頁、11曲、Gクレフ2段、ラテン文字					
	1.「リート曲集」(ライヒャルト単独)					
	X II Deutsche Lieder		1800	Zerbst: C.C.Menzel		R885
63	32頁、12曲(他に Louise Reichardt4曲)、Gクレフ2段(Louise2曲=3段)、ラテン文字					
	1.「リート曲集」(ライヒャルト単独)					
	Twelve Favourite Songs		1800	Berlin: Frölich		-
64	32頁、12曲中3曲(英訳)、Gクレフ2段、ラテン文字					-
	4.「リート叢集」(ライヒャルト以外)IMSLP			"The German Erato" シリーズ3		
	Leonora		1801	Berlin: H.Frölich		R948
65	16頁、英訳、Gクレフ3段、ラテン文字					
	9.「単独出版」			EDM46/IMSLP		
	Lieder der Liebe und der Einsamkeit II		1804	Leipzig: G.Fleischer d.J.		R868
66	72頁、34曲、Gクレフ3段(2段1曲)、ラテン文字					
	1.「リート曲集」(ライヒャルト単独)Serauky/IMSLP/Kemel					
	Douze Elegies et Romances		1804	Berlin: R.Werckmeister		R836
67	22頁、11曲(全曲仏語、他に二重唱1曲)、Gクレフ3段、ラテン文字					
	1.「リート曲集」(ライヒャルト単独)IMSLP					
	Neue Lieder geselliger Freude II		1804	Leipzig: Gerhard Fleischer J.		-
68	60頁(楽譜は挟み込み)、25曲中11曲、Gクレフ2段(3段6曲)、ラテン文字					
	3.「リート叢集」(ライヒャルト編集)IMSLP			Frei=3, Heyne, Hummel, Lauska, Mozart=3, Seidel=2, Zelter, Zumsteeg		
	Monolog aus Göthe's Iphigenia		1804	Leipzig: G.Fleischer d.J.		R955
69	12頁、Gクレフ3段、ラテン文字					
	9.「単独出版」			IMSLP		
	Romantische Gesänge		1805	Leipzig: Hoffmeister & Kühnel		R847
70	20頁、3曲、Gクレフ3段、ラテン文字					
	1.「リート曲集」(ライヒャルト単独)IMSLP					
	Le Troubadour I		1805	Berlin: H.Frölich		R879
71	48頁、独語12曲、伊語12曲、仏語8曲(1曲独語併記)、二重唱2曲(独伊)、Gクレフ3段、ラテン文字					
	1.「リート曲集」(ライヒャルト単独)IMSLP					
	Le Troubadour II		1805?	Berlin: H.Frölich		R879
72	48頁、独語11曲、伊語10曲、仏語10曲、二重唱三重唱各1曲(伊語)、Gクレフ3段(1段1曲)、ラテン文字					
	1.「リート曲集」(ライヒャルト単独)IMSLP			独語1曲に英語併記		
	Berlinische Musikalische Zeitung I		1805	Berlin: Frölich		-
73	独語2曲、伊語1曲、仏語1曲、Gクレフ3段(二段1曲)、髭文字					-
	5.「雑誌付録」(ライヒャルト編集)Hildesheim 1969/IA			他に二重唱1曲、合唱1曲=独、二重唱伊はラテン文字		
	Le Troubadour III		1806	Berlin: H.Frölich		R879
74	48頁、独語12曲、伊語9曲、仏語7曲、二重唱3曲(独1伊2)、Gクレフ3段(2段2曲=独)、ラテン文字					
	1.「リート曲集」(ライヒャルト単独)IMSLP					
	Berlinische Musikalische Zeitung II		1806	Berlin: Frölich		-
75	3曲、Gクレフ2段2曲3段1曲、髭文字2曲ラテン文字1曲					-
	5.「雑誌付録」(ライヒャルト編集)Hildesheim 1969/IA					
	Goethes Lieder, Oden, Balladen und Romanzen I		1809	Leipzig: Breitkopf & Härtel		R856
76	50頁、58曲(1曲伊語併記、他に合唱1曲)、Gクレフ3段29曲2段29曲、ラテン文字					献辞
	1.「リート曲集」(ライヒャルト単独)EDM58/IMSLP			Lieder		

番号	曲 集 名 等		出版年	出 版 地 : 出 版 社		RISM
	概 要		(頁数、曲数、譜表、文字)			序文
	分 類	現 代 版	備 考			
	Goethes Lieder, Oden, Balladen und Romanzen II		1809	Leipzig: Breitkopf & Härtel		R856
77	62 頁、37 曲 (内二重唱 1 曲、他に合唱 7 曲)、G クレフ 3 段 (2 段 9 曲、F クレフ 3 段 1 曲)、ラテン文字					
	1. 「リート曲集」(ライヒャルト単独) EDM58/IMSLP		Vermischte Gesänge und Declamation			
	Goethes Lieder, Oden, Balladen und Romanzen III		1809	Leipzig: Breitkopf & Härtel		R856
78	30 頁、11 曲、G クレフ 3 段 (2 段 4 曲、F クレフ 3 段 1 曲)、ラテン文字					
	1. 「リート曲集」(ライヒャルト単独) EDM59/IMSLP		Balladen und Romanzen			
	Allgemeine Musikalische Zeitung X I		1809	Leipzig: Breitkopf und Härtel		-
79	1 曲、G クレフ 2 段、ラテン文字					
	6. 「雑誌付録」(ライヒャルト以外) Amsterdam 1964		Rochlitz 編			
	Schillers lyrische Gedichte I		1810	Leipzig: Breitkopf & Härtel		R838
80	66 頁、24 曲 (他に合唱 6 曲)、G クレフ 3 段 (2 段 1 曲)、ラテン文字					
	1. 「リート曲集」(ライヒャルト単独) EDM125/IMSLP					
	Schillers lyrische Gedichte II		1810	Leipzig: Breitkopf & Härtel		R840
81	46 頁、19 曲、G クレフ 3 段 (2 段 2 曲、1 段 1 曲、F クレフ 1 曲)、ラテン文字					
	1. 「リート曲集」(ライヒャルト単独) EDM125/IMSLP					
	Allgemeine Musikalische Zeitung X II		1810	Leipzig: Breitkopf und Härtel		-
82	伊語 1 曲 (他に合唱 1 曲 = 伊語)、G クレフ 3 段、ラテン文字					
	6. 「雑誌付録」(ライヒャルト以外) Amsterdam 1964		Rochlitz 編			
	Arnim "Geschichte der Gräfin Dolores"		1810	Berlin : Realschul Buchhandlung		-
83	4 曲 (内 1 曲二重唱)、G クレフ 3 段 (2 段 1 曲)、髷文字					
	7. 「書籍付録」 Hildesheim 1982		Beor, Radziwil=2, Louise Reichardt			
	Goethes Lieder, Oden, Balladen und Romanzen IV		1811	Leipzig: Breitkopf & Härtel		R859
84	44 頁、11 曲 (他に合唱 3 曲)、G クレフ 3 段 (2 段 1 曲、F クレフ 3 段 1 曲)、ラテン文字					
	1. 「リート曲集」(ライヒャルト単独) EDM59/IMSLP					
	Allgemeine Musikalische Zeitung X III		1811	Leipzig: Breitkopf und Härtel		-
85	1 曲、G クレフ 1 段、ラテン文字					
	6. 「雑誌付録」(ライヒャルト以外) Amsterdam 1964		Rochlitz 編			
	III Lieder		1812	Leipzig: C.F.Peters / Mainz: B.Schott		R851
86	6 頁、3 曲、G クレフ 3 段 (2 段 1 曲)、ラテン文字					
	1. 「リート曲集」(ライヒャルト単独)					
	Sonetti e Canzoni di Petrarca		不明	Berlin: L.W.Wittich		R877
87	24 頁、8 曲 (伊語、全曲独語併記)、C クレフ 3 段、ラテン文字					
	1. 「リート曲集」(ライヒャルト単独) IMSLP		1795 以前?			
	Clärchens Lied		不明	Berlin: F.S.Lischke		R901
88	8 頁、G クレフ 3 段、ラテン文字					
	9. 「単独出版」		1804 以降?			
	Anhang zu Beckers Taschenbuch 1809		1815	Leipzig: Cseditzsch?		-
89	54 頁、9 曲中 1 曲 (他に連弾 1 曲)、G クレフ 3 段、髷文字					
	4. 「リート叢集」(ライヒャルト以外) IMSLP		W.G.Becker 編			

表2 ライヒャルト：リート楽譜出版の経緯と楽譜書法のの変遷



主要参考文献

- Faller, Max 1929 "Johann Friedrich Reichardt und die Anfänger der musikalischen Journalistik", Kassel: Bärenreiter.
- Fischer-Dieskau, Dietrich 1992 "Weil nicht alle Blütenräume reiften: Johann Friedrich Reichardt, Hofkapellmeister dreier Preussenkönige: Porträt und Selbstporträt", Stuttgart: Deutsche Verlags-Anstalt.
- Friedlaender, Max 1902 "Das deutsche Lied im 18. Jahrhundert" Stuttgart: Cotta (Rep. Hildesheim: G.Olms, 1962).
- Gstrein, Rainer u.a. 2005 "Schillers lyrische Gedichte mit Musik von Johann Friedrich Reichardt" (EDM125) München: G.Henle.
- Helm, E.; Hartung, G. 2001 Art. 'J.F.Reichardt' "NG2" 21, S.137-141.
- 石多正男 1980 「"Liederkunst" 成立の一側面：デク라마チオン概念の変遷」『音楽学』26 (I) S.1-10.
- Kretzschmar, Hermann 1911 "Geschichte des neuen deutschen Liedes" Leipzig (Rep. Hildesheim: G. Olms, 1966).
- 正木光江 1966 「ヨーハン・フリードリッヒ・ライヒャルトの歌曲について」『音楽学』12 (IV) S.193-206.
- 村田千尋 1982 「音楽的朗誦概念の成立」『音楽学』28 (II) S.156-172.
- 1983 「伴奏の成立：J.F. ライヒャルトのリートにおけるクラヴィーア声部の変遷」『音楽学』29 (II) S.171-185.
- 1984 「有節と通作：芸術リート成立その3」『音楽学』30 (II) S.145-160.
- 1985 「芸術リート成立その4：民謡調リートと芸術リート」『音楽学』31 (I) S.52-65.
- 2001 「18世紀末ドイツ文芸誌における詩と音楽について」『モーツァルティアーナ：海老澤敏先生古希記念論文集』東京：東京書籍, S.300-308.
- 2016 『西洋音楽史再入門：4つの視点で読み解く音楽と社会』東京：春秋社.
- Ottenberg, H.-G.; Grimm, H. 2005 Art. 'J.F.Reichardt' "MGG2" Personenteil 13, Sp.1471-88.
- Pauli, Walther 1903 "Johann Friedrich Reichardt: Sein Leben und seine Stellung", Berlin: E.Ebering.
- Pröpper, Rolf 1965 "Die Bühnenwerke Johann Friedrich Reichardts (1752-1814) : ein Beitrag zur Geschichte der Oper in der Zeit des Stilwandels zwischen Klassik and Romantik", Bonn: H. Bouvier.
- Ruf, Wolfgang (Hrsg.) 2003 "Johann Friedrich Reichardt (1752-1814) : Zwischen Anpassung und Provokation: Goethes Lieder und Singspiele in Reichardts Vertonung", Halle: Händel-Haus.
- Salmen, Walter 1963 "Johann Friedrich Reichardt: Komponist, Schriftsteller, Kapellmeister

- und Verwaltungsbeamter der Goethezeit”, Freiburg i. Br.: Atlantis (Hildesheim: Georg Olms, 2002).
- 1964 “Goethes Lieder, Oden, Balladen und Romanzen mit Musik” (EDM58, 59) München: G.Henle.
- (Hrsg.) 2003 “Johann Friedrich Reichardt und die Literatur”, Hildesheim: Georg Olms.
- Schlager, Karlheinz 1978, 98 ‘Einzeldrucke vor 1800’ “Répertoire international des sources musicales Ser. A; I” Bd. 7+13., Kassel: Bärenreiter.
- Schletterer, H.W. 1865 “Joh. Friedrich Reichardt: Sein Leben und seine musikalische Thätigkeit” Augsburg: J.A.Schlösser’s Buch- & Kunsthandlung.
- Schwab, Heinrich W. 1965 “Sangbarkeit, Popularität und Kunstlied” Regensburg: Bosse.
- Sieber, Paul 1930 “Johann Friedrich Reichardt als Musikästhetiker”, Leipzig: Heitz & Cie.
- 滝藤早苗 1998 「E.T.A. ホフマンと J.F. ライヒャルト：ホフマンの音楽観に関する一考察」『藝文研究』 74 S.340-325.
- 2016 『北ドイツ音楽界の指導者 J.F. ライヒャルト：彼の音楽活動がドイツの詩人たちに与えた影響について』慶應義塾大学大学院文学研究科独文学専攻博士論文（未出版）.
- 田中宏幸 1982 「フリードリヒ・ライヒャルトのゲーテ歌曲：その作品の展望」『北陸学院短期大学紀要』 14 S.47-77.